引用と段落をめぐる閑話

工藤力男

はじめに

ある現象が日本語の文章に広がっている。というと、新語の濫用、慣用句の誤用、破格の文法の類いを思いうかべる人が多いかもしれない。そうではない。引用の関わる段落の書き方に、わたしの学生時代にはなかった方式が目につくのである。これは、軽随筆はもちろん、学生のリポートから学術雑誌の論文にも及んでいる。

わが国文学科では、卒業論文の締切日が近くなると、論文提出に関する注意事項に「原稿用紙の用い方」をそえて配付している。その二項めに段落、三項めに引用文がある。段落は、『学習指導要領』の小学校三四年生に初めて登場し、作文は段落を設けて書くべきこと、改行すべきことなどの指導を求めている。それなのに、大学の最終学年でも注意しなくてはならないのである。

本稿は、特に国文学科で学ぶ諸君にたいして、段落とそれに密接に関わる引用について、ささやかな私見を開陳するものである。取るに足らない些細なことだが、この点に言及した本は管見に入らないので、いささかの紙面を塞ぐ意味はあるだろう。ここでは、学術的な文章を主な対象にして、内容には踏みこまず、専ら形式について書く。

段落の由来

段落について、『日本国語大辞典』第二版は語義を二分し

て書いている。①はここで話題にしている文章論の用法で、初出を『文会雑記』（1782）とする。江戸時代の半ば過ぎ、漢文をものする人たちに行われるようになったのだろう。これから転じた②「物事のくぎり。切れ目。」の意で用いた例は、『当世書生気質』（1885-86）の「一先段落（ダンラク）になりかけた処へ」を初出とする。

早く登載した辞書はヘボンの『和英語林集成』だという。その再版（1872）に、

DAN-RAKU,　ダンラク, 乙, (*yomi-kiri*), *n.* A rectangular mark used to mark a period or end of a subject.

とある。この記述は、漢字「乙」からもわかるように、書物をよんで、途中のよみどまり箇所や、脱字を補うときに印をつける意味で用いたのである。第三版（1886）には次のようにある。

DANRAKU,　段落 (*yomi-kiri*), n. A section, chapter.

対訳は"paragraph"となっていないが、先掲②への転義をみると、明治期半ばにおけるこの語の広がりようが想像できる。

段落は煉瓦とか

段落の重要性を力説した人としてわたしがまず思いうかべる名は、外山滋比古。この人の著書をよむたびに出あったような気がする。その中から一つだけあげよう。『日本語の論理』（中央公論社1973）では、日本人学生が英訳文について米国人の指導をうけたときの話を書いている。原文では一つのパラグラフを、その学生は三つのパラグラフに英訳した理由を問い質されたことを述べて、次のようにいう。

日本人の発想の特色はユニットがはっきりしないで、しかも、ヨーロッパ人より小さなユニットを無意識に用いていることである。このことは世界に比を見ないような短詩型文学の豊かな発達を見せていることと無関係とは言えないかもしれない。(p.48)

続けて、その発想の特色と思想との関連に及び、日本人にはユニットを結合させる粘着性も少なくて大思想はうまれにくいのだとして、

煉瓦は積み上げれば、いくらでも大建築をつくることができるが、箱庭にころがっている小石を集めても大きな

建造物をつくることはできない。

と結論する。

木下是雄『理科系の作文技術』（中公新書1981）は名著である。それには「パラグラフ」の章をたてて重要性を説いている。欧語文にも昔はパラグラフがなかったが、十八世紀ころまでにその概念が確立し、改行する記法が行われるようになった。欧米のレトリックの授業では、文章論のいちばん大切な要素として教えている。日本の明治以降の文章も、欧文の影響かパラグラフをたてるようにはなったが、形だけで内容は伴っていないという。

九年後の著書『レポートの組み立て方』（ちくまライブラリー 1990）では、形式段落と意味段落にわける国語教育界の習慣に言及するが、「段落」を用いない。欧米流のレトリックの授業の「パラグラフ」を採り、「一つ一つのパラグラフをきちっと書き、それらを積みあげ、ゆるぎなく連結して文章を組み立て」るのが欧米流だという。そして、パラグラフを煉瓦に、文章を煉瓦建ての家に喩えている。

木下さんの著書をこえたと自負する戸田山和久も、『論文の教室レポートから卒論まで』（NHKブックス2002）でそれに賛同してパラグラフと段落を分け、パラグラフが煉瓦なら、段落は粘土の塊をちぎったものだという。

本稿では用語が問題ではないので、かかる考えのあることを紹介するにとどめ、「段落」を用いることにする。

以下に引く用例において、行頭と行末は省けないので、行の途中で適宜に省略したことを@で示す。わたし自身の記述と紛れぬように、上下に実線を引いて区別する。

段落初めの一字下げ

一字下げることで段落を書きはじめることが、誰による創案なのかは知らないが、欧米の文章に学んだのだろう。とまれ、合理的、経済的な表記法だといえる。これはまた、引用部分を二字下げることと密接に関わる、とわたしは考える。

近代の文章で、段落初めの一字下げをしない人に折口信夫がいる。この人は引用符をほとんど用いず傍線でそれにかえ、外来語にも片仮名を用いなかった。その例には何でもいいのだが、たまたま読んでいた全集第三巻の「大嘗祭の本義」(p.200) からひく。

説を樹てゝ、見れば、日本の宮@事を伝えて居る。筑紫の山門郡の名称が、神武天皇の@名称とも考へられる。とにかく、何故に、全国@言うた通り、明御神大八洲天

皇詔書……咸聞といふ、言葉@この信仰を度外視しては、何故に日本全体をやまとと言@広まつた、といふ考へのみでは、説明は出来ぬ。

二行めの「考へられる。」に続く次行冒頭の接続詞「とにかく」は、ここで話頭を転換させようとした気息を感じさせる。だが、それが著者の真意か否かはわからない。

右の例にみたように、文が行末でおわるばあい、次の行が段落の初めか否かの判定に迷わされるのである。この全集は一行四十三字で組まれている。したがって、行末で段落がおわることは、四十回に一回ほどの割合でおこることになる。多くのばあいは文脈から判断できるが、右の例のように微妙なこともある。一字の空格とて侮れないので、段落初めの一字下げには大きな意味がある、とわたしは考えるのである。

引用部分二字下げの意味

引用部分を二字下げにすることを厭う人もある。次に掲げる、岡田英弘『歴史とは何か』（文春新書2001）がその例である（p.108）。

一　もう一つ、最初の歴史がどう@どのように受け入れるようになったかという実例@日本の例ではない。

モンゴルでいちばん古い@がある。その冒頭は、

「高き天から命を受けて生ま@ホワイマラルがあった。海を渡ってきた」

という文句ではじまる。

日本では「蒼き狼」として広く@モンゴル語の原文では「白黒まだら毛の狼」という@漢訳では、「蒼色狼」「高き天」からの二行が引用である。改行したうえで引用符をつけたのだから一字下げで十分という論理だろう。だが、引用部をうける「という文句」の行も一字下げにしたので、たいそう紛れやすくなっている。これは岡田さんの信念らしく、『倭国』（中公新書1977）の組み方も同じであるが。

他人の著作の要約は引用の形式にしない岡田さんだが、要約を箇条書きにするときは違う。一例として『歴史とは何か』からヘロドトス『ヒストリア』の箇所をひく（p.57）。

と言い、ギリシアの神話@引用している。

一、フェニキア人の商船員@誘拐してエジプトに連れ去ったという話。

二、ギリシア人がフェニキア@誘拐したという話。

三、ギリシア人がコルキス@誘拐したという話。

このように二行にわたるばあいは、箇条書きで意図した明示性が半減したうえ、著者自身の文の影も薄くなっている。

引用ではないが、一般には鍵括弧で括って語句や文を特立させるところを、一字下げで書く人がいる。多田道太郎の著作からひこう。人と対話するばあいに相手を指さす行為についてのべた箇所である。

> 等な部類に属する。しかも@稀薄さをかくすための、いっそご本人の照れかくしと@取れないこともない。
>
> 真の策士はいたずらに動かず、である。
>
> もとへ戻れば、
>
> 直接、指さないほうがよいのである。
>
> 人がそのまわりに@重したほうがよい。とかく理に走ると角がたつし、角をやわ@背負った業である。社会と

「真の」と「直接」の行が強調部分なのだが、こんなことをわざわざ改行して一行取りで書く必要もないのに、と思う。この本が『日本語の作法』(朝日文庫p.180)であるのは皮肉である。

引用は二字下げること、箇条書きは改行しても番号の上に出ないようにすること。以上、ごく平凡な書き方が最も好ましいという結論になる。

引用二字下げの実態

わたしたちが他書から必要な箇所を切りとってくる引用では、その箇所が原典でどんな位置にあったかということに配慮しないのが普通である。したがって、ひとまとまりの引用文の冒頭を一字下げにもしない。ところが、いかなる引用も律儀に冒頭を一字下げにする人がある。

次に掲げるのは、田中章夫『揺れ動くニホン語問題なことばの生態』(東京堂出版2007)。終戦の詔書などをひいた部分である(p.103)。

> 詔書は、
>
> 朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ@ト欲シ茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク〜
>
> に始まり、「〜爾臣民@セヨ」で結ばれている。
>
> 戦時中の赤紙(臨時召集令状)も、
>
> 右臨時召集ヲ命ゼラル@該召集事務所ニ届出ヅベシ
>
> といった文章だった。

これは、二回の引用後の著者の本文が、それぞれ一行でおわ

った例である。二つめの引用を導く本文「戦時中の…」は話題が転じたわけではなく、新段落を起す必要がなかったのに、一字下げにしたため、印象の散漫な紙面になってしまった。

短い引用のあとで本文が二行以上になると、さらに変な光景が現出する。右の引用の一つ前、「俗文体と揶揄されつつも…」の節には左記の例がある（p.102）。

化に富んでいる。@名作『怪談・牡丹灯籠』の語り口を、

　　俚言俗語の語のみを用ひ@文ごとにうた、活動する趣ありて宛然@乙女に逢見るここちす

と評している。この@文一致運動に大きな影響をもたらしたわけである。

先の岡田さんののっぺらぼうとは対照的な、階段状の紙面はやはりおかしい。

この方式で、例えば本誌に短歌をひく論文をのせたばあいを考えよう。廿三号の拙稿64ページ上段の萬葉短歌について番号を除いて掲げると、次のようになるだろう。

　　はつはつに人を相見て何将有いづれの日にかまたよそに見む

　　いかにあらむ日の時にかも声知らむ人の膝のへ我が枕かむ

　　幸ひの何有人か黒髪の白くなるまで妹が声を聞く

これでは、先にみた岡田さんの箇条書きと同じく、いかにも不体裁である。常識ある人の論文では、歌の頭を揃え、一行の字詰めが少ない紙面では、歌の頭に点や丸をつけたりして、個々の歌を明示するように努めるのが一般である。

一方、複数の段落を丸ごと引用するばあい、段落の設定が原著の体裁どおりになされるのは当然である。わたしが書くとしたら次のようになる。

遠藤周作の『海と毒薬』の冒頭は、敗戦後の復興もさほど進んでいない東京郊外の、真夏の国道沿いの光景を次のように書きおこされている。

　　八月、ひどく暑いさかりに、この西松原住宅地に引越した。住宅地といっても土地会社が勝手にきめただけで、新宿から電車で一時間もかかる所だから家かずはまだ少ない。

　　駅の前を国道が一本、まっすぐに伸びている。陽がカッと路に照りつけている。どこから来るのか知らないが砂利をつんだトラックがよく通る。トラックの上には手拭を首にまいた若い人夫が流行歌を歌っている。

このような光景の中を、肺に空洞が見つかって気胸療法を受けなくてはならない語り手が歩く姿は、作品の展開を予測させるに十分である。語り手は、夏の西陽のあた

二つの段落をそのまま続けてひくのだから、段落の冒頭はそれぞれ一字下げすることになる。紙幅が制約されるときなど、改行位置をスラッシュで示して簡略化することもある。

引用部の前後

冒頭に書いた「原稿用紙の用い方」に、わざわざ「引用の前後一行は空ける必要はない」と書いてある。おそらく枚数を水増ししようとする学生の機先を制したのだろう。これはわたしの表記観と一致する。だが、前後に一行をあけた文章が出版物にたいそう多いのは、営業政策なのだろうし、わたしも常にそれを拒むというわけではない。事によりけりである。上引の戸山田さんは、長い引用文は鍵で括らず前後を一行あけて二字分くらい下げることを勧めている（p.234）。

実例をいくつか見よう。初めは丸谷才一『桜もさよならも日本語』（新潮文庫）から、冒頭の章「国語教科書を読む」の「6　漢語を使ひ過ぎないやうに」の末尾五行（七行というべきか）。三年生用の教科書の「ひらけていく海」という教材に言及したくだりである。

学校図書『小学校国語』三下@あれこれと書いたあとで、

青く広がる@人間の「きぼう」のしるしなのです。

と結んでゐる。どう見ても@で「きぼう」といふ漢語は果して必要なのか@ずいぶん変つてゐたはずである。

わずか一行を引用するこの箇所の前後に、一行の空白を設ける必要があるとは思えない。戸山田さんが長い引用に限って、と言ったのは適切であった。

次に掲げるのは、『文学』第五十六巻六号（岩波書店1988）の一論文の冒頭（p.212）である。

万葉集巻十五@羅国使の歌百四十五首のうちの、

周防国玖珂郡麻里浦行之時作歌八首

に、

3634筑紫道の　可太の大島　し@　見ねば恋しき　妹を
置きて来ぬ

があり、又、

過二大嶋鳴門一而経再宿之後追作歌二首

3638これやこの名に負ふ鳴門@玉藻刈るとふ海人少女ど
も

がある。「可太の大島」に@かつて筆者の見解を『源氏

この論文は全篇この調子である。著者の執筆方針を尊重した編集者の神経も太すぎるのではないかと思う。

軽随筆は扱わない方針だが、『図書』（岩波書店2006.10）に載った、小池光「犬の歌　猫の歌」から二箇所をひく。この広報誌は十九字詰めなので、行の途中に省略はない。

茂吉には犬の歌がいろいろあって、戦争直前期の、

この一月に棄てられしは牝犬なりしかば
初冬は犬の母の位ぞ

などというのもしみじみした情感を感ずる。

＊

石川啄木の最後の歌は、またこういうものである。

庭のそとを白き犬ゆけり。
ふりむきて、
犬を飼はむと妻にはかれる。

啄木にしてはとても明るい感じのする歌だ。

本文に戻った行頭は一字下げである。かくてすかすかの紙面と相なったのである。このような美意識の歌人の歌は御免こうむりたい。

「と」は助詞である

引用のあとで本文に戻ったとき、必ず一字を下げる人がある。本稿執筆の直接の契機になったものである。いつ始まっ

たか突き止めていないが、三十年ほど前から散見する。

『文学』の第四十三巻五号（1975.5）の八篇中の二篇にそれがみえる。初めに『とはずがたり』を論じたものから。

肩をふませおはしましておりさせ@……いまだ御幼なく侍りし昔は馴れつかう@御覧じわすれけるにや。

と「いとゞ涙も所せく」申@すでに三十七歳の女院に、引用部を一字下げで始めるこの論文には、本文に戻って一字下げの「と」で受けた十一箇所、自立語「この」などの一字下げで受けた五箇所がある。

もう一篇は川端康成の『末期の眼』を論じたもので、やはり十一箇所にその用例がある。

〈そしてまた、祖父が死に@からこそ、せめてその面影をこんな風な日記@置きたいと思ってゐたのでした。〉

という動機をも伏在させてい@病める祖父がやがて死山型の括弧で引用を明示したうえで、なお本文を一字下げて「と」で受ける書き方である。

右の二篇で本文に戻ったとき受ける語は、「と」以外はすべて自立語であるが、二年後の『國語國文』第四十六巻十号（1977.10）の一篇にはさまざまな語が見える。その一例をあげる（p.41）。

ところで、今右にあげた源氏物語に見られる

湖月抄本　いとになく
河内本　いとにげなく

の異同については、「になく」を@解する感情の存在ここに用いられた「の」は助詞である。この論文には「など」「等」、それに主格助詞「が」さえもある。いずれも非自立語である。それを段落の、すなわち文の初めに置くということがわたしには納得できない。

「と」だけは特別な語、引用の助詞である。「彼は必ず来ると言った」をかくとき、傍線部を引用符で括ることも、その前後に読点をおくこともする。だから接続詞「とまれ」も、副詞「とかく」も派生しえたのである。ほかに、接続助詞として用いられた「が」も、先行文を切りはなして接続詞に成りえた。しかし、主格助詞「が」にその資格はない。

厳密にいうと、引用から本文に移ったとき、行頭をあけずに書けば前の段落の続きを意味するのであり、一字下げて書けば次の段落の始まりを意味することを知らなくてならない。実際に目にする書き方は、このことに対してほとんど留意し

た形跡がない。

以上、新しい段落が始まっていると錯覚させるような書き方をすべきではない、という単純なことが実行されていない不思議さを指摘した。

おわりに

以上、わかりきったことを書いたようで気がひける。

筋で釣って余白で読ませる――これは、林芙美子が新聞小説の要諦としたことばだという。名言である。多くの読者をひきつけ、多くの原稿料をえるには、これは有効な手段であるに違いない。いま朝日新聞朝刊に連載中の「宿神」などは、さしづめ余白で釣って筋で読ませるような書き方である。

本誌十五号（1999.3）の拙稿「現代表記の論理と美学」の末尾に、「私に〈司馬遼体〉〈永六体〉と称する段落構成の問題もあるが、それは、またの機会にしよう。」と書いておいた（p.15）。前者は無意味な改行と無意味な一字下げ、後者は一文一段落を指して名づけたものである。むろん、小説や軽い読み物はこれでいい。だが、近年は堅い文章にもその影が及んで来ているということである。

百人百様の文体があっていい。だが、修行途上にある学生は何も奇を衒う必要はない。まず型をきちんと身につけることを心がけるべきである。型を体得せずして型を崩すことはできず、何が自分の文体かもわからないことになる。

（くどう・りきお　成城大学教授）